令和８年度第１回岩手県立図書館協議会会議録

１　日　時　令和８年６月２日（火）13：30～15：30
２　場　所　岩手県立図書館　研修室
３　出席者
（１）　協議会委員
吉植 庄栄　委員（会長）　江刺 由紀子　委員　平　留美子　委員
髙橋 真二郎　委員　千葉 万美子　委員　細田　清　委員
事務局
ア　県立図書館
森本館長　下向副館長　佐藤特命課長　澤口主査
諸岡主事　橋爪主事　北林主事
イ　生涯学習文化財課
髙橋社会教育主事
ウ　指定管理者
菊池総括責任者　安保副総括責任者　似内副総括責任者
白野サービス部長　鍋倉総務部長

４　会議の概要
（１）開会
岩手県立図書館管理運営規則第 10 条第２項に基づく会議の成立を報告
（２）挨拶
森本館長
（要旨）
・図書館を取り巻く様々な課題がある中で、特に資料費については当協議会でもご意見をいろいろいただいているところである。今年度の当初予算では昨年度に引き続き、資料費については少し増額となった。ただ物価高騰で書籍資料代も高騰しているが、この増額分については有効に活用し、図書館サービスの充実に努めていきたいと考えている。
・令和８年度図書館運営の中で、昨年度開設した読書バリアフリーのコーナー。特にアクセシブルな資料をさらに充実させるほか、また、県内でも読書バリアフリーについての周知がまだまだ不十分で、特に学校図書館についてはまだまだ課題があるかなと思っており、今年度はより一層多くの皆様に知っていただき、啓発に努めていきたいと思っている。
・また外国籍の方々も増えてきている中で、多文化共生に関わる資料もどのようなものを揃えていけばいいか、今年度はさらに検討していきたい。
・公衆送信サービス等についても、これまでに引き続き他館の事例、様々な課題を整理しつつ引き続き検討を行っていきたい。

・I-ルームについては、東日本大震災から 15 年を迎えるというところで、次世代への継承、また県民の皆様の防災意識の醸成、こういったところはますます重要になってきており、一層の企画イベント、各学校の探究的な学びの支援の充実を目指している。そして今年度は新たに沿岸部へ「出前 I-セミナー」ということで、図書館も盛岡で待っているだけではなく、沿岸部の方に行って、イベント等も開催していきたいと考えている。
・昨日もちょうど洋野町の大野中学校の 1 年生が I-ルームを利用して、事前に調べたい項目をたくさん出していただき、実際 I-ルームに来て多くの資料を見て調べていた。中にはテーマを変えてぜひ原発も調べてみたい、というふうに原発関係の厚い資料を読んでみたり、各都道府県別の明治元年から能登半島地震までの災害史年表という、レファレンスに使われたりする資料で、何月何日何が起きたのかが書いてある資料にまで興味関心が広がる生徒もいた。ある男の子はこの資料の東北地方の部分をずっと 1 ケ月見ていき、最後は青森県を借りて（残念ながら岩手県が貸出中）行った。やはり、このように子ども達の関心に対してこれだけ多くの資料があると、受け止めることが可能である。自分自身の関心とヒットするものも見つかることも多い。来館する時にはまだ 1 年生であるため、これから学習していこうという段階、つまり課題やテーマが定まってない中で、問題意識を明確にする機会だったり、自分自身はこれを調べてみようと考える機会になったりするかと思われる。大野中学校はこの後、「洋野学」といって洋野の地場産業だとか震災学習列車、大雨洪水とか様々な学習が予定されているが、その最初の段階に関心を持っていくきっかけとして、ファイルもご利用いただいた。
・同じく大野中学校の生徒は、絵本をいろいろ借りていただいた。先生からは、防災ゲームを借りたいと相談を受けたが、その後いろいろな資料を借りていただいた。
・県立図書館としての大きな役目である市町村支援については、これまで好評だった情報交換会の開催や、職員研修の充実を図って参りたい。
・2 月の協議会でも話題になった中高生に向けての読書推進の取り組みについては、これまで県立図書館でビブリオバトルをやっていたものを、今年度から県教育委員会主催となり、取り組むことになった。県立図書館を会場に開催するが、これも 1 つのきっかけとしてより一層中高生の読書推進に取り組んでいきたいと考える。
・6 月の終わりに高教研図書館部会がアイーナで開催されるが、そこでは高等学校の図書館と公共図書館との連携をテーマに、吉植会長がコーディネーターとなり研修会が行われる。県立図書館も共催ということで運営に入り、県内の公共図書館と高等学校の図書館の連携についても、当館としてできることを努めていきたいと思っている。
・お手元に、リーフレットがあるが、岩手県立図書館がアイーナに移転して 20 年を迎えるということで、様々なイベントを指定管理者で企画しているので、ぜひこれを多くの県民の皆様に知っていただき、改めて県立図書館の意義を県民の皆様に PR して、利用者増につなげていきたいと思っている。
・令和 7 年度の利用者とか、貸出冊数とか、その統計の概要を見るに、残念ながら少し減少

してきている。特に児童、貸出冊数のところが、課題であると考えている。改めて、保護者世代にも、引き続き訴えていかなければいけないのではないかと思っている。目まぐるしい社会の変化の中で、改めて図書館のあり方、県立図書館の役割については、今後検討していく必要があると感じている。

・最後に、第 77 回北日本図書館大会岩手大会が 6 月 19 日の金曜日に、ここキオクシア　アイーナ　アイーナホールで開催される。県外からの参加者をはじめ、岩手県内の図書館界の皆様にも参加いただく予定である。特にテーマが「危機管理」なので、様々な課題に対して解決に向けて学び合いサービス向上に資する大会になるよう準備を進めて参りたいと思っている。

・本日は令和 8 年度の図書館運営についてご協議をいただく。委員の皆様からいただくご意見をもとに、県立図書館のサービス充実と機能強化を図って参りたい。忌憚のないご意見、ご示唆を賜れば幸いである。

（3）報告及び協議

1　令和 7 年度県立図書館業務実施状況及び利用状況について

〔資料№.1 により指定管理者から説明〕

【下向副館長】次に、岩手県立図書館管理運営規則第九条第 2 項の規定により会長が会議の議長になることとされているため、以後の進行は吉植会長に依頼する。

【吉植会長】次第 3（1）令和 7 年度県立図書館利用状況について、図書館から説明をお願いする。

【鍋倉総務部長】前年度の図書館の利用統計について報告させていただく。資料の No.1 の p.1 について、入館者、個人への貸出者数について入館者数、個人への貸出者数ともに減少している。うち児童コーナーの入室者数も減少している。近年学校の統廃合が課題になっているが、出生数が岩手県はアイーナが開館した当時の（平成 18（2006）年）は 1 万人を超えていたが、令和 6（2024）年度は 4,896 人で 5,000 人を下回った。出生数が 20 年前に比べて半分以下になっている。図書館がある盛岡市で見ても出生率は年々減少しており、少子化による影響は大きく将来的にも減少は続いていくものと思われる。

一方、入館者数が減少する中で I-ルームの利用が増加している。I-ルームは、令和 6 年度から本格運用が始まり、東日本大震災津波や防災を含む今日的な課題について学びあうスペースとして、非常に多くのイベントや展示を行っている。催事による集客があり、また広く認知されたことによる利用の定着があったものと考えられる。

次に、p.2 について、団体貸出は前年度と比較して貸出冊数が減っているが、利用した団体の数が 12、利用回数が 29 と大きく増えている。この表ではわからないが、内訳を見るとテーマごとにまとめて貸し出すセット貸出を利用した団体の数と、その冊数が前年度の約 2 倍になっている。セット貸出を利用した団体の多くは震災防災関連がテーマのセット貸出で、小学校、中学校、高校、大学と学校への貸し出しによるものである。令和 6（2024）年度に本格運用が始まった I-ルームの運営のために立ち上げたふるさと未来課が、県内で開

催する復興や防災関連の研修会に直接出向いており、セット貸出の展示や活用事例のパンフレットを配布するなどして、探究学習などの利活用を呼びかけるなど、多くの周知活動を行ってきた結果によるものと考える。これからも震災の実情と教訓を伝承する震災伝承施設の１つとして関連資料とI-ルームの活用を広めて参りたいと考えている。

なお、セットの申し込みは震災防災以外の一般的な探究テーマでの貸出希望も増えており、沿岸、県南、県北と県内各地から寄せられている。さらにフリースクールや放課後児童クラブへの貸出も整備した。こちらの方も利用が始まっているところである。

次にp.3について、視聴覚資料の利用は貸出点数が増えている。視聴覚資料は普段閉架書庫に配架しているが、テーマを持たせたミニ展示などで図書と一緒に展示することによって、手に取りやすい環境にしており、継続的な利用にも繋がっているものと思われる。

次にp.4について、レファレンスが今年度は増加しているが、その年によって増減があるものである。次に、電子資料、マイクロリーダーのところで、電子資料について内訳を見ると、この表ではわからないのだが『岩手日報電子縮刷版』の利用が伸びている。市町村史の編纂に利用する自治体もあるようだ。また、マイクロリーダーでの閲覧に比べて、年代やキーワードで一気に検索することができ、利便性が非常に高いので、『岩手日報電子縮刷版』の利用は年々増加傾向になっている。

次におはなし室、ミニシアターについてである。おはなし会はボランティアの人数が多かったため２つの団体に分かれていたのだが、転居とか就職活動などで人数が減り１つにまとまり、その分の開催回数と参加者が減っているところである。映画会については、開催回数は変わらないが、参加者数が増えている。コロナ禍から時間が経ち、ミニシアターへの集客が回復してきたことと、映画会担当のスタッフが利用者にとって関心の高い、良い作品を選んでくれていることも大きいかと思う。

その他、催事については『要覧』の方で説明する。p.29、p.30に記載があるが、4階展示コーナーの企画展示を年間で5回行い、その他ミニ展示を通年で239回、施設見学については97件の依頼に対応した。イベントは、一般向け催事と子供向け催事と一覧になっているものがあるが、様々な催事を合わせて40種ほど開催している。

これまで説明したように入館者数、個人への貸出者数が減少する中で、新規利用者の開拓に向けた様々な取り組みを行っているところである。

【白野サービス部長】次に、運営業務全体について、報告させていただく。詳細は、本日配布の令和７年度岩手県立図書館運営業務実績報告に記載しているので、私の方からは簡単に報告させていただく。まず催事面からだが、来館促進対策として、令和７（2025）年度も多彩なイベントを開催した。主催事業としては、「ピーター・J・マクミラン講演会」に始まり、令和６（2024）年度から定期開催している「世界のボードゲームであそんでみよう」の他、図書館資料の利用促進に繋がる興味関心の喚起、来館のきっかけづくりを目的とした、「ラッピングマナー&フラワーボックス作り」、「姿勢美人ストレッチ」、「整理収納講座」、「ふっくら布草履を作ろう！」、「図書館寄席」などを実施した。早くから定員に達してキャ

ンセル待ちが出る講座があるほど、いずれも多くの方に参加いただいた。企画展示関連のイベントとしては、「岩手の城跡を巡る」を開催した際に、九戸城をはじめ南部藩の城や歴史をテーマに多彩な地域振興活動を行っている南部武将隊の方々を講師に迎え、歴史語りをしていただいた。

また「本で知ろう！いわてのいきもの」を開催した際には、八幡平市在住の写真家である三浦ガク氏を講師に迎え、国指定天然記念物である八幡平市の「大揚沼モリアオガエル及びその繁殖地」をテーマに講演会を実施するとともに、三浦氏が撮影した大揚沼モリアオガエルの写真パネルを期間中、展示した。子どもを含む幅広い年代の方に企画展を見ていただくきっかけになったと感じている。

児童向けの催事について、子育て中のお母様を図書館として応援することができないかと考え、令和３（2021）年度から始めている「赤ちゃん向けおはなし会」を始め、「図書館で絵本とベビーヨガデビュー」、「飾って贈れる！親子で楽しむツリー型ラッピング」や、職員が講師を務めて開催した「親子向け製本講座」など、親子で一緒に参加できるイベントを開催した。

職員が行っているお話会では、岩手県国際室、国際交流員の方を迎えて、英語での読み聞かせを行い、マジックを交えたお話会など興味を引くよう工夫し開催した。幼少期から図書館に触れていただき、図書館を生活の一部として、身近なものに感じてもらいたいと考え、実施している。

その他、他団体主催事業や共催事業の受け入れも多く行っている。特に、盛岡地方気象台、岩手県警察との共催イベントは、それぞれ 100 名を超える参加があった。令和 7（2025）年度も様々な催事を開催してきたが、今現在図書館を利用している方以外の方が、催事を通して足を運んでもらうきっかけになればと思い実施している。他に特筆すべき点として、読書バリアフリー環境の実現に向け、昨年度から職員内で検討チームを立ち上げている。その成果の１つとして、一般開架には「やさしい本棚」、児童コーナーには「りんごの棚」を新たに開設した。このコーナーには、点字資料や簡単な日本語表現の資料、音声字幕つきや場面解説つきの資料など、アクセシブルな資料を並べており、このコーナーを開設したことで点字絵本の貸出が増えている。コーナーの充実に向けて今年度も引き続き検討を進めていく。

また、岩手県特別支援学校連絡協議会との連携展示「つながる作品展～特別支援学校 17 校によるリレー展示」や、「るんびにい美術館『であい授業 in 岩手県立図書館』」の継続開催。岩手県立大学の学生サークルであるユニスポの皆さんを講師に迎えた「わくわくボッチャ体験」などを開催した。施設面だけにはとどまらず、すべての人に開かれた場の実現に向けて、こちらも継続的な取り組みをしているところ。

I-ルームの運営については、１年目に構築した関係機関との連携を基盤に、担当部署であるふるさと未来課の職員が中心となり、より充実した事業展開を図った。震災防災について学ぶ I-セミナーの開催、I-ルームにおいては、いつ来ても何かしらの情報がえられるようにイベントに関連するパネル展示や所蔵資料の展示などを随時行った。

また、復興教育関連や防災関連の研修会に積極的に参加し、I-ルームでの探究学習利用やセット貸出についての利用を呼びかけた。こうした取り組みが実を結び、セット貸出の利用件数は昨年より増加している。それに伴い、一般的な探究テーマでの貸出希望も増え、岩手県と協議の上、セット貸出の要綱の見直しを行った。また、「いわての復興教育」に関わる21項目に対応するブックリストを作成し、こちらはI-ルームに設置し、ホームページ上でも公開を始めている。ブックリスト作成については、今年度も引き続き取り組んでいるところ。セット貸出に関しては、昨年度、フリースクール・放課後児童クラブセット貸出の運用を開始し、要望に合わせた資料を貸し出している。こちらについてはまだ利用件数が少ないが、引き続き資料の充実と周知に向けて取り組んでいきたいと考えている。

職員向けの研修も外部から講師を迎え実施している。その中でも特筆すべき研修は、岩手県立博物館の専門学芸調査員を講師に迎え、県指定有形文化財で当館ではマイクロフィルムで所蔵している『吉田家文書』についての研修で、郷土資料と、さらには災害についての知識を深めた。絵本専門士である藤村友樹子氏を講師に迎えた読み聞かせ講座を行い、絵本の持ち方やページの送り方、プログラムの立て方など、絵本の読み聞かせの基礎知識を学んだ。また、岩手障がい者職業センターを講師に迎え、障がい者を取り巻く現状、障がいの内容と、基本的な配慮事項について学び、障がい者雇用促進に向け職場内の理解を深めた。今後も研修に積極的に参加して、図書館運営の品質向上に努めていきたいと思っている。

【吉植会長】ただいまの説明について質問や意見等いかがか。

【江刺委員】送付いただいた資料を拝見して、少なからずショックを受けた。例えば、利用状況の貸出冊数である。令和6（2024）年度に比べて令和7（2025）年度はマイナス2万冊となっており、そのうち児童が6年度6万7千冊であったのが、7年度は5万6千冊と1万冊以上減っている。この先も人口減少は止まらずどんどん進んでいくとなったときに、貸出冊数もますます減っていくのを私たちは見守るしかないと思ってしまう。

このような状況では、貸出冊数の数字等での事業評価が難しくなっていく。数字での評価もこれまで通りおこないつつ、それ以外の評価方法を重んじるようにしていくのが妥当かと思われる。

利用者、来館者の方々の満足度が、事業評価に大きな意味合いが出てくる時代になってくるのではないか。そして、今回出された実績報告書の中にも自己評価実施状況であるとか、意見要望事項等の対応状況が掲載されている。あまり多いページではないのだが、こちらの方を今後もっと充実させてもよいのかもしれないと思う。

例えばアンケートのところはどうか。来館者のアンケートの詳しいところは載ってないのでわからないが、本の品ぞろえ、辞書郷土資料の充実、新聞雑誌の品ぞろえ等々、そういう図書館に必要なアンケート等、大事な部分ではあるが、その他に、例えば来館者が使いやすいかとか、居心地がよいかとか、職員の方々の対応をどう感じたかとか、リピーターにますますなってもらうために重要なところと考える。そのような部分も、これからは事業評価の中で重視すべきなのではないか、と感じたのでお伝えした。

【吉植会長】江刺委員の意見に感謝したい。回答を特に必要としないということだが、それで思い出したことを述べる。いつも減少した背景を安保副総括が個人の見解で、多分これが背景だろうみたいなことを言われているが、今日は鍋倉部長が説明を担当している。鍋倉部長にも背景、人口減少とかそれとも何か他に考えられるのか、もし話せる内容があったらお聞きしたい。
【鍋倉部長】私の方で調べたところでは、人口減少のところを見ていた。特に児童の減少が非常に多く、入館者数のうち児童コーナーの利用者が大分減っていたので、出生数のところで考えた。あとは全体的な県内の人口の減少として、開館当初に比べて岩手県の人口が 20 万人は減少しており、その減少は大きく響いていると考えている。その他としては、個人的な見解になるが、アイーナが開館してから、近隣の図書館のリニューアルが続いており、近隣では最近では高松（盛岡市立図書館）、矢巾、紫波、滝沢、県内の他の図書館でも新しくなっている図書館があり、それぞれの地域の図書館の利用が充実してきているということも背景にはあるのではないかと個人的には考えている。
【髙橋委員】今は人口減少とかいろいろあるが、私の孫などを見ていると、前は岩泉の図書館へ行って職員の方と仲良くなり、いろいろな本を毎月まとまった冊数借りたりしていた。ところが中学校、高校とだんだん成長してタブレットを持つようになり、そして自宅で（電子書籍を）たくさん出して読んでるようなこともある。そのようなことも、貸出冊数の減少ということの一因であるかもしれない、という私の個人的な考えだが。
あと、在宅障害者等への郵送貸出が増えている。これは、外に出られない人達へこういう情報提供が増えたから貸出者数が増えたのか。そういうサービスが増えたのか。やはりこれはいいことなので、図書館に行きたくても行けない子どもから大人まで情報提供すれば、郵送貸出が増えるのではないか。これも増えている部分を大事にしていく必要があるのではないかと考える。
先ほど I-ルームでいろいろ熱心に見ていた子どもたちがいたと聞いた。やはり図書館は従来以上に調べ学習の部門を掘り下げて、ネットで調べるだけじゃなくて、そこで実際にいろいろ調べ、ずっと継続して勉強できるような形というのも、1 つのスタイルとして持ってもいいかなと感じた。特に地域ならではの、沿岸部なり内陸なりいろいろな文化の違い、過去の歴史とかそういう違いがあるので、ここに行けば詳しく調べることできる、という取り組みもやはり面白いと思う。
【鍋倉部長】お話のとおりタブレットやスマートフォンの普及などで、余暇の過ごし方が 20 年たって、全く環境が変わっているなというのは実感としてあり、オンラインを使った余暇の過ごし方というのは非常に増えていて、図書館へ足を伸ばす機会が減ってきているのかなというような印象は確かに受けている。
それから在宅障害者への郵送貸出はだんだん利用も定着してきて増えているところなので、今後も引き続き利用していただけるように努めて参りたい。
【江刺委員】先ほど、私が話をした貸出冊数が 1 年間で 1 万冊以上も減ったことと、児童

の少子化についてを考えたときに、例えば盛岡のその年の児童数と、貸出冊数との割合、つまり児童一人に対して貸出冊数は何冊かというような計算をしてみるのもいいかもしれない。どんどん人口が減っても、充実しているかどうかが図れるようなデータの取り方を試みてもいいかと思い、ちょっと難しいことをご要望するがよろしくお願いしたい。
【菊池総括】心がけてできるだけ比較を出して、いい方向に結果が出るようにしていきたいと思っている。
　今年度、20 周年ということで貸出のポイントを付けるカードを作ってやっている。そうするとやはり少しだけ貸出が伸び始めている。カードにポイントをつけて何か景品をもらえるとか、そういうことがあるとちょっと違うのかなと思い、またそういう形で何か考えていければと思っている。
【千葉委員】図書館協議会資料の p.3 の在宅障害者等への郵送貸出のところで、これは障害者と認定されている人、なにかそういう資格をある人に郵送するということか。それとも、最近はもう高齢化で、足も悪くてなかなか歩けないようなお年寄りもいると思うが、そういう方々は対象になっているのか。
【白野部長】在宅障害者の方への郵送貸出については、障害者手帳をお持ちの方を対象としてサービスを行っている。その他宅配サービスがあり、そちらについては、障害の有無にかかわらず、こちらから郵送をして貸し出しするというサービスを行っている。
【千葉委員】その宅配のサービスというのは有料なのか。
【白野部長】宅配サービスについては、利用者の負担で貸し出ししているものである。
【細田委員】各論というか小さい話になるのだが、先ほどの電子資料の利用の説明で、『岩手日報電子縮刷版』の利用が増えているという説明を受けうれしく思った。電子資料が 4 割ぐらい増えているということである。マイナスの数字が多い中で、数はそれほど多くないが、その中で増えているというのは、私の立場からも嬉しいことである。うちの会社（岩手日報社）にももちろんこれがあり、とても便利である。昔の事件とか或いは災害でも何でもニュースをどのように当時は報じているのだろうとキーワードを入れて検索すると、画面できれいに当時の誌面が出てくる。そこを切り取ってコピーすることもできる。かなり古いものまで網羅しており、非常に良いシステムと思っている。
　図書館なので控えめに並べていると思うのだが、PR してそれをきっかけに調べ物をしながらこういうものがあるなら、と図書館に足を向けるという人が 1 人でも 2 人でも増えるといいと思ったりする。そのあたり、どのように利用者の方に目につくような広報の工夫をされているのか、現在の状況についてもう少しお話いただきたく思う。
【白野部長】『岩手日報電子縮刷版』は、郷土資料コーナーの奥の方に配置しており、PR については今のところ大々的にはしていない。昨年度から、電話で時間を予約した上で利用ができるというサービスを開始しており、以前よりは利用しやすい状況になったのではないかと思っている。とても使いやすいデータベースであるので、PR については検討していきたい。

【吉植会長】ちなみに導入時、100 万円ぐらいかかっていると聞いたのだが、同じぐらい毎年かかっているのか。年々下がってくるみたいなことがあるのか。
【澤口主査】導入当時は機械そのものも一緒に導入したので、結構高額な金額だったのだが、今は毎年その 1 年分のデータを購入している形なので、そこまでの高額ではなく、毎年同じぐらいの金額で購入している。
【吉植会長】初期投資を含めた価格であったのであれば納得である。というのは、ぜひ岩手日報以外の新聞のデータベースもあると、おそらくさらに利用者の利便性とスタッフのレファレンス対応での利活用性が上がると思う。しかし、データベース契約料は、料金がそれなりにかかるので、資料費の増額或いはその何か購入資料の見直しのときに、他の東北の新聞、或いは全国紙のデータベースの導入も選択肢に入れて欲しい。他の新聞のデータベースも契約をして実際に現場で提供すれば、利用者の一層の増加が見込まれるのではないかと思う。ぜひ検討していただきたい。
【平委員】とてもたくさんのイベントをやられていると思い、すごいなと感じている。子どもの利用、貸出冊数が減っているというところは、やはりここまで連れてくる保護者がいないというか忙しいのだろうなと感じている。であるので、土曜日でも日曜日でもここに子どもを連れた保護者が来てくれるような取り組みに力を更にそそいではどうか。さきほど保護者へのアピールに力を入れているというお話をされたが、そこをもっと押してあげるといいのかなと感じている。
洋野町立種市図書館では、子育て中のお父さんお母さんの心に響く絵本みたいなものを選んで、「大きくなったら」とか、「あんなにもこんなにも」みたいな本、ヨシタケシンスケさんの作品とかずらりと並べて置いていくようなことをしている。児童室に来たお母さんたちもそれを手に取ってみることで、自分だけがやっていることが報われているというか、子育てをちょっと経験して感じたことだが自分頑張っているな、とかそういうことを思えるところにヒットすると、子どもを連れて行くだけではなく、自分が行きたいから子どもと一緒に行く、みたいな姿勢ができてくるといい感じで図書館に足が向くのかなと思っている。今のお母さんたちは図書館に行って勉強させて、というところもちょっとあったりして、子どものためにあると思っている人達もいる。しかし、自分のために子どもと一緒に、というところをちょっと気づいてもらえるような仕掛けを作るといいのかなと思っている。種市図書館ではブックスタートもやっているが、今はお父さんも普通に来るようになった。6 ヶ月健診でも 1 歳 6 ヶ月健診でも普通にお父さんが来て、危なげなく自分の子どもをあやしたり、他の子どもたちにも声をかけたりと非常に上手な若いお父さんもいる。そのような風に時代は悪いとこだけじゃなくて、いい感じにも変わってきている。そこのところに向けて、将来の読書週間を育てるため、それこそタブレットだけでも駄目だし、本だけでも駄目だし、両方あっての相乗効果っていうのもあると思う。そのようなところを諦めずに推し進めていくのも必要だと思う。
先ほど江刺委員から、満足度アップのところに焦点を当てて、そこで図書館がいかに充実

しているかというところを考えてみてはどうかというお話があったが、自分たちがやっていることの成果を数字だけであるとやはりどうしてもマイナスばかり目立つ。また、増えてるなあと思ってもちょっと足りなかったりもする。利用者がどのように満足しているか、自分たちがどのように貢献しているか、というところも計れる方法があればいいなと思っている。そして、自分も図書館にいるのでそういうところも模索しながら、方法を考えられればいいなと思う。

利用者の満足度アップというところで、今年度、種市図書館と大野図書館で利用者と一緒に図書館事業、図書館の仕事体験みたいなことを年間で 5 回程計画している。企画展を一緒にやってみたり、5 月には蔵書点検にも参加してもらったりしている。分類番号を覚えたりして、図書館の人達がどのようなことをやっているかというのを一緒にやってみて、自分がイベントを打ち立てる側に立つ経験をしてもらう。それによってやりがいも感じられるだろうと思い、今年実施している。満足度を与えるだけじゃなくて、一緒にやって満足、充実という感覚を得る機会を設けるのもいい方法なのかなと思い、今年度初めてやってみた。小さな図書館だからできるのかなとは思うが、県立図書館でも難しいかもしれないが、やってみてはどうか。こちらの考える、利用者にこれをやらなきゃ、利用者にやってあげなきゃというところではなく、逆に利用者がどのようなことをして欲しいのか、というのを聞くことができるいい機会になるのかなと思う。

【白野部長】とても参考となった。お話を聞いていて、お父さんお母さんの心に響く本を置くというところが特に良かった。やはりお父さんとお母さんが来てくれないとお子さんも一緒に来てくれないので、お子さん向けも大事であるが保護者向けにも、心に響くようなイベントや本の展示等を企画していければ良いと思う。参考にさせていただく。

【江刺委員】今の平委員の続きで、本当にいろんなイベントをやっていて素晴らしいなと思う。この頃うちで今年度やっていて、ちょっと受けているイベント 2 つ、あまりにも受けてるので連続して月 1 回開いているものを紹介する。中央の方で流行っている「積ん読読書会」というのをやっている。交流の場の提供の中に入ると思うのだが、自分で積んで置くだけで買った後読んでいない本を持ち寄り、そこで 1 時間、2 時間、1 人で読む。みんなそれぞれ別々に読んで、読んだ後お茶を飲みながらどんな本読んでるの、こんな本読んでるよ、みたいな紹介をし合う。この「積ん読読書会」は、人口 3 万 1 千人しかいない大船渡市でもちゃんと人が集まっている。それから逆に、1 冊の本について、みんなで語り合おうではないかという大人向けイベント「本のおしゃべり対話会　大船渡で哲学カフェ」。そんな感じで今回はミニマリストの本について、これでみんなで話し合いあいましょうという会を実施した。みんなてんでんばらばらの人たちが申し込んで、本好きが集まってしゃべって交流する。これも毎回違う人たちが来る。次は大人向けの絵本にしようか、みたいな感じで。こういうイベントもあるので紹介する。

【吉植会長】情報提供、有難いと思った。そのような交流の場みたいなものを実施しようという意識は、岩手県立図書館の企画にはあるか。

【白野部長】交流の場という面で言えば「世界のボードゲームで遊んでみよう」は、スタッフと参加された利用者で 1 つのゲームを進めていくという点で交流が生まれている。スタッフと利用者だけではなく、利用者同士がボードゲームを通して交流を深めることができるイベントである。令和 6（2024）年度から定期開催で、2 ヶ月に 1 度の割合で開催をしている。

【髙橋委員】県立図書館といえば、やはり県内の図書館の指導的立場の図書館という意味でとらえてよいか。例えば、岩泉町では独自のイベントをやっている。しかしその中で、やはり読書離れ、ということでまず読み聞かせを親がもうしないのではないかという意見や考え方もある。それから読書であるが、本に親しむというのは、親が読み聞かせることによって、子どもがそれを覚えるということから始まっていくのではないかと考えられる。そのため、読み聞かせ教室を行ったり、生まれた赤ちゃんに絵本をプレゼントしたりとか、そういうことを 1 から始めようと考えている。何かを調べたときに分かったが、親が全然本の読み聞かせをしないとのことである。ゆえに、そういうことから始めようとしている。県立図書館はお話会の実施状況はいかがであろうか。資料に読み聞かせ会とか明記されてないので、実情はどうかなと思い聞いた。そういうことは、やはり県立図書館としては、各地域の図書館、小さな図書館に任せるべき、という捉え方しているのか、と勝手に思ったりしたのだが。

やはり、今の子はなかなか本を自分から読むということはしない。それは親がまず読まないからである。小さな頃から親が読み聞かせることによって、本を読む習慣がついてくると思う。そこからやはり変えていく必要があるんじゃないか。幸いにもうちはずっと読み聞かせをしていたので、いつの間にかみんな本が大好きになり、多くの本を読むようなった。ふと気が付いたら、私は（読み聞かせを）やっていたなあと思う時がある。だから、各家庭がまず読み聞かせをすることによって、本に馴染んでいく。これを家庭から始めていく。まず絵本からとかなんでもいい。そういうことから、もう 1 回考え直した方が手っ取り早いのではないかと考える。ある程度大きくなってから、読書しなさいと言っても多分、読まないのではないかなと思う。

あとちょっと気になったのは、レファレンスの件数がずっと増えてるが、具体的にどういう相談が寄せられているのか。相談件数が徐々に増えているようで気になった。

【吉植会長】1 つ目は読み聞かせの話、2 つ目はレファレンスの実際の具体的な内容について、県立図書館側から回答をお願いしたい。

【白野部長】まずお話会については、「赤ちゃん向けお話会」を毎年開催しており、こちらは子育て中のお父さんお母さんを図書館側からも応援したいと、令和元(2019)年から始めている。児童コーナーにいらした親子連れにこちらから声をかけて、希望された場合その親子だけに向けて、15 分程度を読み聞かせをするもの。対象の子どもの年齢に合わせて内容も変えながら行っており、保護者の方からどういうふうに読み聞かせていいかわからない、というような相談にのったり、ブックスタートのリストをお渡ししたりしている。

レファレンスの内容は多岐にわたっており、郷土に関するものからご自身の苗字の由来、テレビや新聞などで取り上げられて話題になった身近なもの、動植物の名前は何か、というようなもの等、本当に様々な質問が寄せられている。

【吉植会長】熊のレファレンスとかないか。そういうタイムリーな話題はないか。

【白野部長】そういったレファレンスを受けた職員もいるかもしれない。

【吉植会長】最近必要に迫られてノルウェーの公共図書館のイベントの研究をしている博士論文を読んだ。今非常にアメリカでも日本でも社会分断（いろいろな社会の層が経済格差や価値観の違いにより交流が薄れ敵対関係になる状況。日本では外国で大きな問題である民族間の分断よりも、年齢層や経済格差、価値観の相違が近年目立つ。）が話題になっているが、図書館のイベントが、その分断を解消するという効能があるという研究である。ちょっと眉唾のところはあるという気もするが、その内容を少々紹介したい。この論文で取り上げられるノルウェーでは移民が多く人種間の社会分断が発生しがちである。しかしその移民ともともとの住人たちが同じ図書館で開催されるイベントに参加することで、交流が深まり分断を緩和することができる。この場合例えば、言語カフェとかをやって、移民はノルウェー語を学ぶ機会、元々の住民は移民の言葉を相互に理解する機会とする。関連書籍の利用促進にもなる。しかしこの例であると日本だとちょっとあまりピンとこないので、年齢層の紹介をする。年配の世代と、若者層たち或いは子供達が一緒になって何かをするイベントとか。それから、デジタル環境が家によって格差が大きいので、デジタル環境が悪い家と、いい家の方が一緒にやれるようなもの、情報リテラシー教育の差が大きい家庭の分断をつなぐようなイベントもノルウェーの図書館のイベントでは実施されている。これらをすることによって、社会の安定の一翼を公共図書館が果たしているという内容である。

さきほど出会いの場、交流の場という話が出たが、ノルウェーでは図書館法の方針で出会いの場の提供が掲げられている。5 年前とか 10 年前から結構最近の話になるのだが、国策でそれが指示されているらしく、図書館がいろいろな層の出会いの場をプロデュースするというような機能を持っているそうだ。ということで、私もイベントというと、従来人と本をつなぐという図書館の蔵書の利用促進のきっかけになるとか、或いは先ほどお話にあったように図書館に来ない層の発掘とか、そういったことに意味付けであるべきだという考えを持っていた。しかしこの博士論文を読んで、図書館のイベントは実は社会のいろんな層の人が出会う機会を作っているという効能が確かにあるかもしれないと学んだ。そして、これは他の機関ではなかなかできないことで、公共図書館だからこそ、信頼性や安全性があるから出会う場所をプロデュースできるのだ、という話もこの博論に書いてあった。

そこでこのような視点を今後意識して、イベント企画をもう少しブラッシュアップして欲しいし、これまでは思いつかなかった企画をやってみようという話になって欲しいなと思う。早速お話したのだが、企画の際の参考にしていただけると大変ありがたいと思った。

２　令和８年度県立図書館運営計画について

(1)〔資料№2 により県職員から説明〕
【吉植会長】では、令和８年度県立図書館経営計画について、それから令和８年度運営業務実施計画について、図書館側から説明をお願いしたい。
【下向副館長】初めに令和８(2026)年度の岩手県立図書館経営計画について説明させていただく。まず、今年度の重点項目が２点ある。１つ目は、県立図書館の移転開館 20 周年関係である。県立図書館が現在地に移転して 20 年目を迎えることから、年間を通して様々なイベントなどを開催するなどして、当館の存在意義を改めて PR しながら、利用者の増加につなげていこうとするものである。
２つ目は、北日本図書館大会関係である。本年６月 19 日金曜日に、この建物キオクシアアイーナで、北海道、東北地区の公共図書館職員等を対象とした北日本図書館大会を開催する。今回は、「図書館における危機管理」をテーマとして、「備える」ことの重要性を発信しようとするものである。
次に、運営方針について、昨年度からの変更点や今年度新規のものについて説明する。まず１の運営方針、図書館機能の充実については、本年１月末に当館３階にアクセシブルな資料を集めた棚を設置した。先ほど指定管理者側から紹介があったが、大人向けには「やさしい本棚」、子ども向けは「りんごの棚」と名付けている。アクセシブルな資料については、まだ少ない状況なので、今後も計画的に購入し、資料の充実を図って参りたい。
また、県内に居住する外国人が増加していることなどから、多文化共生に係る資料の充実に向けた検討を進めていく。さらに、職員の育成については、図書館に係る専門知識を有する司書の資格を持つ県職員が少ない状況であることから、昨年度に引き続き、今年度も職員１名が７月から９月にかけて、大学の司書講習を受講して資格を取得する予定である。
次に、3 の運営方針、図書館資料の収集、整理、保存及び活用については、引き続き、I-ルームに配架する資料を充実させていく他、岩手の復興教育「生きる・かかわる・そなえる」の学習に役立つ資料を選定し、ブックリストを作成するとともに、出前 I-セミナーを含むワークショップを開催している。また、震災防災に関する探究学習等で I-ルームの利活用を推進していくため、学校などに呼びかけるとともに関連資料の検索の補助などを支援していくもの。さらに、１のところだが、古文書や震災関連資料については、末永く保存活用していくことが重要であることから、計画的にデジタルアーカイブを進めていく。
次に、6 の運営方針、学習機会の提供と読書活動の奨励については、これまで読売新聞社を中心として開催していた「高校生ビブリオバトル岩手県大会」を今年度から岩手教育委員会が主催して実施することとしている。
また、これまでも学校や市町村立図書館などに当館の資料をセットで貸し出していたが、昨年 8 月から新たにフリースクール、放課後児童クラブに対しても、同様のサービスを始めているところである。今年度についても、新たな貸出先の検討など、セット貸出の推進に努めていく。
次に、7 の運営方針、市町村支援及び連携については、当館では毎年、市町村立図書館等

と共同で調査研究事業を実施しているが、昨年度からは、各図書館で発生した様々な危機管理事案に関する事例を取りまとめた資料の作成に着手しており、今年度の完成に向けて引き続き取り組んでいくものである。また研修についても、さらに充実に努めていく。
【吉植会長】p.1 の 1. 運営方針の司書資格の取得支援ということについて質問する。昨年から実施している資格取得者を増やす事業は、大変いいと思う。一方、2 つ疑問があるが、1 つは、まず、大学の集中講義（オンライン）を受ける形で実施しているが、開講期間中の 7 月から 9 月まで、その間出向扱いとなっているものの職場に出勤して受講しているのか。この司書講習は、7 月から 9 月まで集中して受講せねばならないので、通常業務をしながらでは非常に大変な負担ではないかと思う。一方、通信教育であれば、1 年や 2 年かけて履修していくし、自分の都合の良い時間に学ぶという形式なので、もう少し仕事に影響を与えないような履修方法である。司書講習を昨年から選ばれているが、受講する職員が大変なのでどうにかならないのか、というのが 1 つ目である。2 つ目は、県の人事で県庁の中に司書資格を持っている方の情報の把握はしているのか、というものである。ある程度、資格取得者が在籍していると思うが、人事異動のときにそこをあまり考慮しないのではないかと就任した頃からずっと思っていた。現在県立図書館に在籍中の県職員に資格を取得させる努力は良いと思う。しかし一方、持ってる方を優先的に配置していれば、この努力もそもそもしなくて良いのではないかと思ってしまう。というこの 2 点になる。1 つ目は司書講習というか、司書資格を取るときのやり方をもっと楽な方法で実施してはいかがであろうかということ、2 つ目は、人事異動の時点で司書資格のある人を優先的に配置していれば、そもそも異動後に資格取得させなくても良いのではないかという話である。
【森本館長】1 点目の司書資格の取得については、科目数の多さと、土曜日、日曜日の講習の場合もあるので、その間の業務については、他の職員の方で割り振り対応することとして、司書資格取得に向けて専念できるようにしている。2 点目の人事については、これまでもずっと県教育委員会の教職員課等とも相談してきたのだが、やはりなかなか司書資格を取得している職員は多いとも限らず、また取得していても現在の配置の関係もある。資格取得と人事配置の両方で、考慮もしていただくよう相談している。図書館でも司書資格の取得をして人材を育成していくという、ふた通りで考えているところである。
【吉植会長】後者の方は、もちろんそれは考慮に入れて、人事を考えているということで了解した。
　前者の方は通信教育の方が体にはやさしいと思うので是非検討して欲しい。やはり盛岡大学の学生が 4 年かけて履修して取得するものを 3 ケ月でやることは、仕事をしながら非常に大変であると思う。かつてあった富士大学での司書講習を受講した方に訊くと、当時泊まり込みで、毎日授業で大変だったという話である。それを今勤務しながらやるのは本当に大変だと思う。ぜひ、通信教育の方も考えていただければなと思う。
【吉植会長】p.3 の予算の説明というのは特になかったと思うが、今年度予算と昨年度予算との比較を中心に、簡単に説明していただきたい。

【下向副館長】予算関係で、図書情報システムに関しては前年度より減額になっているが、図書情報システム機器の更新で、大きい部分の機器更新を昨年度しているので、今年度はその備品、つまり機器の部分が減っているため、予算額が減少しているところである。

2つ目の図書館資料の収集整理保存のところは、100万円程度増えているが、これは資料購入費が100万円ほど増えており、少しばかりではあるが資料購入費の予算を増額したというところである。

【吉植会長】増えた100万円で、今年度選書でどこを重点的に増やそうとお考えか。もし方針が決まっていれば、ぜひ教えていただきたい。

【諸岡主事】増額分の予算は、基本的に読書バリアフリーの資料に使用したいと考えている。「やさしい本棚」や「りんごの棚」を新設したので、早速、布絵本を購入した。これからも大活字本や点字の本等の予算をなるべく増やして購入していきたいと思っている。

【吉植会長】新コーナーに注入するのは大変よいと思うし、今まで資料に触れられなかった方々が触れる機会が多くなると思うので、大変いいことだと思う。

それから指定管理者への委託料が、今年度上がっているのは人件費高騰とか何か理由があるのか。それとも今年は特殊なイベントがあるとか、なのか。

【安保副総括】指定管理料の増加は、昨年度から賃金スライド制度が適用されているためである。賃金水準の変動に応じて指定管理料も一定の計算式に基づき変動するというもので、これにより指定管理料が少し上がっており、近年の賃金の上昇分に関しては、この増額分で対応できている。

【吉植会長】やはり今日の物価高騰に合わせた措置ということで、皆さんの待遇が良くなるのはよいことであると感じる。ぜひ今後も現場のスタッフの皆さんの待遇がアップデートしていくことを祈念する。

【髙橋委員】漠然と予算が出ているが、どこかの県との比較とか、人口1人あたりの基準で、岩手県のこの予算というのは多いか少ないか全然わからない。他県とくらべて、首都圏等の財政豊かなところと比較するのは違うが、どうなのだろう。多いのか、少ないのかを知りたい。

【吉植会長】私が答えるのはなんなのだが、東北6県の中で一番低いはずである。ただ、もし人口1人当たりの積算をすると、もしかしたら首都圏よりは良いのかもしれないが。例えば隣の宮城県は予算が高いがその分人口が約200万人と多いので、それで割るとそんなに差はなかったような記憶がある。ただ絶対的な額で言うと、岩手県は低いというのはもう歴然としている。青森の3分の1とかである。隣の青森県の方が、人口が少ないのだが合計額でも圧倒的に少ない。そのような対外的には恥ずかしい数字ではあるが、ただ1人当たりからするとそれほどでもなかった記憶がある。

【森本館長】資料費に関しては全国、東北で比べても低いという状況だが、ただその前までは下がり続けていて、資料費もかつては5千万円あったところが3千万円になり、さらにと下がっていったところ、協議会でも大分ご意見もいただき、また県教育委員会の方でも予

算獲得に向けて、微増ではあるが昨年度、今年度ということで、増額をしていただいてる。管理運営費の費目に影響を与える物価が非常に上がってきているので、実質、何か新しいものを、というところではないがというのが実情である。
【吉植会長】ずっとマイナスシーリングで下がり続けていたものが、ここ 2 年間、森本館長や図書館の皆さんのご尽力で少し増え、岩手日報の記事にもなり、大変いいことだと思っているのでこれが続けばいいと思っている。
【江刺委員】今の話だと、人件費高騰を受けて指定管理料も増えているとのこと。ちゃんと上げてもらえているのはありがたいと思う。上げられない厳しい状況なので指定管理料は据え置きもしくは減額といわれてしまえば、その金額でやるしかないということもよくある。その観点から、ちゃんと業績は出せているという評価を示し、予算の確保に説得力を持たせる必要がある。
【千葉委員】令和 8（2026）年度でということではないが、先ほど吉植会長がノルウェーのお話をされて、これまで図書館は人と本をつなぐというようなことを念頭に置いて、いろんな活動をしてこられたりした部分も多いかなとは思うけれども、ノルウェーの例だと人と人との出会いを作る場というようなお話だった。ふと考えたのが、子どもの時から本に出会わせようということで、子どもに向けての読み聞かせとかいろんなイベントをいろいろな図書館で考えていると思うし、またその親世代に向けて、親も喜ぶような、親も来たくなるようなことも考えているかと思う。しかし、ぽかんと抜けているのが、例えば 20 代、30 代の出会いがあったらいいのではないかと思われる世代に向けて、例えば、本好き同士で同じ本であるとか、これが自分はすごく読んで感動したとかいうようなことを語り合ったりする場が、友達を増やすという意味で同性でもいいと思うし、異性間でピンと来たみたいなことも、あってもいいのではないかなと思う。そういう出会いがあるような、読書会みたいなものがあってもいいのかなと。あまり出会いを前面に出すのもいかがなものかわからないが、そういう場があってもいいのかなと思う。感性が似ている人同士の出会いの場をつくれるのじゃないか。しかも、図書館というきちんとした場で、何かよからぬ人も来ないような気もするがいかがであろうか。
【吉植会長】孤独に生きている 20～30 代というのも 1 つの社会問題だと思うので、それの解消というのは私もなるほどなと、今聞いていた。またノルウェーの話になるが、もちろんそのような青年層の出会いを促進するイベントもあれば、同世代の人種を超えた繋がりも作るような機会もある。あとすごいのが政治家、政治の方針を主張するイベントとかもある。日本で公共図書館にて政治イベントをやることはタブーと感じられるが、要するにその右だろうが左だろうが、中立にみんな呼んで、それでイベントで政治の討論をするというものを図書館の場でやるみたいなこともノルウェーの公共図書館ではあるらしい。このように同世代の出会いとか選挙政治といった生活に密着しているのが、非常にすごいと感じた。ノルウェーではこの通りだが、日本だとやはり本を介したとかじゃないとか多分、大義名分としては難しいのかもしれない。しかし今の話を受けていかがであろうか。パッと聞いて、図

書館側の皆さんから、これだったらいけるかなみたいな企画はあるものだろうか。
【似内副総括】よいアイディアをいただけて感謝したい。今のところは、図書館という公共の場で、年齢で区切るとか、性別で区切るとか、そういうのが少々難しい状態で、むしろ、どなたでもいらしてください、このイベントいいですよ、というような案内をしているところである。現在、移転開館 20 周年企画としてスタンプカードを配布している。スタンプを集めるとオリジナルクリアファイルがもらえるものである。イベントもスタンプの対象となっていることもあり、今年度から子ども向けのおはなし会に、割と年配の利用者が顔を出している。年配の参加者は子ども達と交流しており、「何十年かぶりでお話会に来たな」と感想を述べられるなど出会いの場を創出している。それ以外にもテーマ別でイベントを開催しており、今後も折り紙とかピラティスとか、そういったものも予定している。私たちはどの催事も年齢などで区切っていなかったため、年齢を区切るというアイディアは新たな視点である。今後の事業の展開の参考にさせていただきたいと考えている。ありがとうございました。
【江刺委員】新たにイベントを企画するのはハードルが高い場合があるので、既に実施中のイベントを派生して新たな試みにすると取り組みやすい。ボードゲームを定期的に実施している様子だが、回によってターゲットを決めてもいいかもしれない。例えば 6 月予定のの「世界のボードゲームで遊んでみよう」を 20 代、30 代限定とか。うちの団体でもボードゲームを毎月行っているが、お茶とお菓子も用意して会話がはずむよう、家の茶の間で楽しんでいるような雰囲気作りを心掛けている。知らない参加者同士が仲良くなるような工夫をしている。既に実施中の活動の新たな展開だったら、難しくなくスタートできるのではないか。
【吉植会長】補足情報であるが、宮城県の富谷市に図書館が本年 5 月 1 日にオープンした。開館前に配架とかサイン入れのお手伝いをしたので、その時に館内の案内をしてもらった。ティーンズコーナー（YA コーナー）にボードゲームがあり、それからホワイトボードに好きなことを書いていいところがある。それだけじゃなくて、Nintendo Switch（ゲーム機）が置いてあり、みんなで遊べるコーナーになっている。開館の時、早速近所の子供たちが 30 人ぐらいそこで一緒の画面見て盛り上がっているのを副館長さんが SNS でアップしていた。欧米だと公共図書館にゲーム機はしばしばあるそうだが、日本だと多分東北で初めて置いたと思われ、チャレンジだと思う。そのように何かいろいろなことが使えるヒントを多く入手できると思うので、富谷市民図書館（ユートミヤ）の視察の計画がもしあれば、おすすめしたい。最初はちょっと全国からいろいろな人が来て混んでいるかもしれないが、きっと面白いと思う。
【細田委員】資料を拝見していて、危機管理という言葉が目についたが、市町村と情報を共有するとか、あと、今度の北日本大会もテーマがそういうものであるということで、ぜひ充実したものになればいいなと思った。令和 7（2025）年度のこの報告書を読んで、p.38 に、報知器の誤作動でスプリンクラーから水が漏れたという事例が書いてあるが、アイーナの

ような新しい施設でも、こういうこともあるんだなと思っていたところである。これについては、再発防止とか、対応について今後に向けて参考までにお聞きしたい。それから、危機管理にもいろいろあるんだなと思って資料を拝見したが、青森の方の報告が書庫の狭隘化と書いているが、こちらの県立図書館の書庫について状況をお聞きしたい。ちょっと違う話だが、全国の博物館で、もう収蔵庫が満杯で、せっかくの文化財を捨てるしかないみたいな議論になってるところもあると聞いているが、こちらの県立図書館の書庫はどれぐらいまだ収蔵できるのか、その状況を参考までにお聞きできれば。

【吉植会長】漏水に関することと、北日本図書館大会の書庫の狭隘化の発表に対して、県立図書館の状況はどうか。

【安保副総括】漏水の原因は明確で、4 階新聞雑誌コーナーの直上階で施設のメンテナンスが行われた際に、スプリンクラーが物理的な衝撃で誤作動してしまったことによるもの。このような場合には、通常は配管の元栓を閉めて水を止めるが、その辺りに少し時間がかかったらしく、床の埋設コンセントが水没するぐらいの水量になってしまったそうだ。床下部分の気密性が高ければ、その部屋だけで済んだとは思うのだが、隙間から梁等を伝っていった結果、4 階の新聞雑誌コーナーの天井から出てきてしまった、とこのような流れだったと聞いている。

予防策としては、施設担当部署の方で気をつけて作業していただくしかない。ただ、幸いにも職員の方で素早く動いて、ビニールシート等を一時的にかけて、その間に資料を避難させ、どうにか被害は免れたので、こういうこともある、ということで新しく入ってくるスタッフには、危機管理の研修の際に伝えるようにしている。

それからもう 1 点、県立図書館の書庫の状況については、以前別件で少し調べたことがある。全体の収蔵能力は、要覧の p.4 に記載があるように約 154 万 6 千冊で、I-ルームの書架増設により、以前より少しだけ増えている。その増設分も含めて、書庫の使用率おおよそ 6 割強というところになっている。ただ、その 6 割強の中には、資料としてデータベース上で管理されていない新聞が含まれておらず､おそらくそれを入れると 7 割弱ぐらいになる。収蔵量としては、現在館に移転して 20 年で、大体 1 割から 2 割ぐらい増加してることになり、向こう 20 年ぐらいは、まだ大丈夫かと思われる。ただし、この空き容量は各書庫に散在している状態であり、まとまってどこかが空いているというわけではない。実際、当館で一番大きい書庫である集密書庫は、一部の分類では資料の配架場所を変えていかないと新しく資料を入れられない状況になっている。それから団体書庫と呼んでいる県内の読書施設や読書団体向けの一括大量貸出用の書庫があるが、そこの棚は通常は本を配架しない最上段まで本が並んでいるような状態で､収蔵能力に対する収蔵量も 100％を超えている状態である。そのような状態なので、配架場所の全体的な調整、或いは本当に不要な資料については今後､除籍をしていかなければいけないという状況になっている。数字の上ではまだ余裕はあるものの、実際の運用上は、このような状況である。

【吉植会長】平委員の種市図書館等は本当に書庫がいっぱいなので、県立図書館が県内の図

書館の本を保存書庫として活用するようなことができればいいと思うのだが。もう 20 年も経ってこちらも当初の方針で入れていくと局所的にもう溢れているとこもあるということで、書庫全体の見直しとか、保存する資料も基準の見直しとかも発生すると思われる。そのところはぜひ効率良い収蔵をお願いしたい。県内の市町村の公共図書館は、大体 30 年経つと書庫がいっぱいになり、困っているという声をよく耳にする。小さな自治体だと書庫の増設や施設の更新ができないため、捨てるしかなくなる。その自治体で貴重なものは捨てられないので、それに準じるものを県立図書館で預かれるようになると本当はいいと思うのだが、県立図書館もスペースが無いということで残念である。

【平委員】団体貸出書庫が今いっぱいということだが、大野図書館が利用しているので書庫に入ったことがある。蔵書が多い紫波町図書館でも借りに来ているので、もっと周知すると、他の図書館でも借りたいというところが出てくるのではないか。そうするとその書庫に入っているのが貸出になると隙間が空いてくる。セット貸出の推進というところに力を入れると話されたが、学校とか特に団体貸出の書庫には往年のいい作品というか、読んだらすごく面白いとかいうような本が結構あるので、学校へのセット貸出を組んでみると面白いのかなと思う。移動図書館でも、ある小学校では図書館職員が選んだ本を読みたいという希望が来たりするので、どのような本を選んだかというのはすごく楽しみとなっている。自分たちで選ぶのも楽しいけど、どのような本を自分のために選んできてくれたのかなというのが、楽しみのひとつのようである。そのため、書庫の中の本を貸し出しするのと、学校側に貸し出すことが団体さん側にとってもそのセット貸出の魅力というのもある。手間がかからないというのも魅力の 1 つと借りる側の方はあるみたいなので、工夫してセットを作ってみて、それをアピールしていくと団体貸出の書庫は開くというか回転してうまく資料が回っていくのではないかと感じている。

　あと読書会だが、先ほどから、世代別、違う世代の人たちの交流っていうところのお話だが自分も昨年あたりから子どもが高校生になったので、高校の読書会に保護者（自分）が入ることができる。保護者も行って参加してみたら、やっぱり面白い。1 つの本に対して、みんなが読んでそれについて語り合うというのは、やはりいろんな世代がいても考え方が似ていたり、また違っていたりと面白い。図書館は誰でもいつでもというのもあるので、やはりそういう形で読書会等をやってみると面白い。そこで気の合う人たちが見つかるし、この人たちとは合わないとかいうのは判断できるので、男女の出会いの場としてでもいい感じになるんじゃないかなと思う。5 の運営方針のところに、若年層や子育て世代などの居場所づくりとして挙げているので、ぜひここに関わるものとして、読書会、ボードゲームとか、人が集まるところということを最低限打ち出して、読書好きじゃない人もそこに引かれてやってくるみたいな感じを作っていけばいいのかなと思う。

【吉植会長】1 つ目は、団体貸出書庫をいろんな学校や図書館にアピールすることで棚が開く。もう 1 つは読書会を開催してみるという提案であるが、館内の皆さんいかがであろうか。

【安保副総括】団体貸出について、できるだけ多くの団体に使っていただきたいが、その際

におそらくネックになっているのが、直接来館しての資料選びと貸出手続きが必要となること。やはり、遠方の図書館等は、なかなか来るのが難しいだろうなと感じている。利用を促進していく上ではその辺りの運用方法を見直す必要があるのかなと思われる。これに対し、当館側で選書して貸し出すという運用も考えられるが、これはこれで貸借に係る費用負担が課題として出てくるため、予算と一緒に考えていかなければならないことと思われる。

一方、団体貸出の一種である学校向けセット貸出については、現在は宅配便を使って往復とも当館負担で実施している。今のところ団体貸出用図書は対象資料に含めておらず、システム処理との兼ね合いもあるのだが、そのあたりの運用について、もう少し何かやり方を工夫できればよいのかなと思ってお話を伺った。

それから読書会について、一昨年の 12 月ごろから 1 年ほどかけて文部科学省で有識者会議が開かれていたが、その中に地域共創というキーワードが出ていた。いろいろな地域の主体が関わりあって、図書館、或いは、図書館界隈といったらよいか、そういうところを一緒に作り上げていこうというもので、改定を控えている新たな「望ましい基準」の中にも、おそらく反映されることと思う。これを踏まえて考えれば利用者同士が交流する、或いは図書館を本の貸出以外の場としても活用していく、今後はこうした使い方を普及させ、伸ばしていく必要があるのだと思う。先ほど 20 代ぐらい向けに特化した読書会を、とのお話もあったが、様々な主体に本を媒介にしていろいろな形で繋がってもらうというところは、今後力を入れなければいけない部分なのかなと考えている。

また、冒頭の部分で利用統計についてお話をいただいていたが、こうした新しい図書館の機能を打ち出していくことが、新たな評価軸を見出すことにも繋がっていくのかなと、お話を伺って感じた。

(2)〔資料№2 により指定管理者から説明〕

【吉植会長】指定管理者の方から、資料 2 と 2－2 についてご説明をお願いする。

【似内副総括】やさしい本棚、りんごの棚、多文化共生について、副館長の方から今年度力を入れていくとお話があった。昨年度、りんごの棚を設置したが、多くの方にこういった資料がある、そして棚がここにあるよというところを知っていただきたいということで、児童コーナーにて「クイズりんごの棚ってなあに？」という催事を現在開催している。こちらは、当該書架にどんな本が並んでいるのかということを子ども達はもちろん、大人にも実際に体験することを目的とした催事を実施している。加えて、多文化共生を念頭に置きながら、やさしい利用案内の発行を予定している。こちらの利用案内はピクトグラムや写真を活用しながら、ふりがなつきのわかりやすい日本語で書かれた利用案内である。日本語を母国語としない方や、文字の識別が難しい方も含め、幅広く多くの方に便利に活用いただける利用案内になる予定。

移転開館 20 周年関連はお手元のチラシをご覧いただきたい。こちらの中で、いくつかピックアップすると、年度当初の 4 月からお気に入りの本を紹介掲示する参加型催事「ブックツリーみんなで育てる読書の木」を開催している。こちらはお薦め本をカードに記入して、

木の幹を模したポスターの前に掲示するということで、みんなでブックツリーを育てていこうというものである。すでに多くの方にご参加いただいて、貼る場所がいっぱいになってきている。皆さん紹介コメントが上手で、見いっている参加者が非常に多く見受けられている。紹介された当館所蔵の本は展示して、未所蔵であれば相互貸借をご案内している。こちらの催事を通して新たな本を手に取るきっかけや、いろいろな人からの読書のアイディアを得るなど、交流のきっかけになればと考えている。現在 3 階吹き抜けで開催しているが 12 月まで場所を変えながら、継続して開催する予定である。スタンプカードも先ほど申し上げたが、非常に好評である。ぜひご参加いただければと思っている。20 周年関連催事としては 5 月 9 日、当館所蔵の県指定有形文化財『岩手県管轄地誌』をテーマにして、東北学院大学文学部歴史学科の兼平賢治教授による講演会を開催した。こちら『岩手県管轄地誌』は移転開館後の令和 5（2023）年度に文化財登録されたもので、今回初めてテーマとして取り上げた。オンライン参加も含めて 96 名の方が参加された。

そのほか、館内を巡りながらクイズに答える、ウオークラリーも予定している。加えて、本日はご欠席だが当館協議会委員の澤口たまみ氏を講師に迎えた講演会を 7 月 12 日 13 時 30 分から開催する。こちらは前回協議会で吉植会長からヒントを得て、その場で児童担当が澤口氏に相談させていただいて開催の運びとなったものである。お手元に講演会のチラシを配布しているで、ぜひご参加頂きたい。

続いて企画展であるが、令和 4（2022）年から今年まで岩手県県政 150 周年期間と定めて様々な事業を展開しているところ。現在当館では、「県政 150 周年記念　岩手県誕生物語」を開催している。戊辰戦争とか、岩手県誕生に至るまでの幅広い歴史を当館所蔵資料とともに解説している。続いて 8 月からは「岩手のお米　今むかし」という企画展を開催予定。昨今の米価格高騰を受けて企画しており、南部藩の凶作、飢饉、現在の岩手オリジナル品種作成の道のりなど、幅広い視点で岩手の米に関わる内容を予定している。2 月には、「のぞいてみよう貴重書庫－ビジュアルから楽しむ貴重資料－」と題した企画展を開催する。貴重書庫に立ち入ることは出来ないのだが、こちらに所蔵する絵図や巻物、各種案内とか図案集等は視覚的にも楽しめる古文書類、そういったものが収蔵されている。こうした資料を一堂に会して展示することで、難解に思われがちな資料群への関心向上を図ること、加えてデジタル化の契機をつけるということを目的として開催することにしている。「岩手県誕生物語」や「岩手のお米」は巡回展として希望する市町村図書館でも展示される予定で、広い県域の多くの方にご覧いただければ、と考えている。

今日的課題解決としては、6 月 20 日に盛岡市動物公園の辻本園長を講師に招き講演会「園長、クマはどうして街に出てくるんですか？」を開催する予定である。こちら来館がかなわなくても YouTube Live でのオンライン配信をするので、ご視聴いただければと思う。7 月 4 日には県土整備部砂防災害課による実験を含めた講演会を開催予定としている。この他児童向けとして防災や自然災害をテーマに、自由研究をしてみようということで、7 月の最終週に「防災で自由研究⁉お悩み相談室！」という催事を I-ルームで開催予定である。テーマ

決めから関連資料の紹介、まとめ方等職員が子ども達に個別に相談対応することにしている。これ以外にも防災・災害関連の課題解決に役立つ催事を継続的に開催していく予定としている。その他の催事として各世代とかいろいろな興味の場で集まっていただければというところで、専門家を招いた催事を関心が高いと思われるテーマで開催する予定としている。現時点の予定で 6 月は折り紙、こちらはもうすでに定員に達し、申し込みは終了とさせていただいている。9 月にピラティス、10 月は腸活、11 月には図書館寄席、12 月には水引細工、というバラエティー豊かに展開する予定となっている。

催事等については今、報告させていただいたが、この他合間を見つけて各部署で資料展示を展開している。ちなみにこの資料を作るために一昨日館内巡ってみたところ 30 を超える資料展示を現在開催している。引き続きどなたでも 1 人でも多くの方に図書館に足を運んでもらえること、交流の場が生まれること、新たな知識や興味に出逢っていただくことなどを目標に職員一同で、今年度も頑張って参りたい。

【吉植会長】今の説明に質問はあるか。

【協議会委員】特になし。

【吉植会長】5 番のその他、委員の皆様から何かあるか。或いは図書館いかがか。

【委員・図書館】特になし。

【吉植会長】無ければ、以上をもって本日の協議会における審議事項はすべて終了する。

最後に、今期で委員を退く髙橋委員、千葉委員から挨拶をいただいた。